編集後記

「今日も元気だ、でも、鼻は痛い」。

令和4年は、正月明けから新型コロナウイルス（オミクロン株）感染者数が爆発的に増え1月15日1,829人を最高に徐々に減少しているものの、編集後記の原稿を書いている2月中旬時点でも700人前後の感染者数で推移しています。

これだけ感染者数が増えると、誰しも家庭、職場での新型コロナウイルス感染症の濃厚接触者疑いとなり、PCR検査や抗原検査を受けることも少なくない。私自身も時に連日の検査が必要となり、それで冒頭の言葉が出てくるが検査が受けられるだけでも有難い事である。

令和4年2月・3月合併号の内容は、先月号までと同様に新型コロナウイルス感染症のワードが多く出てくることに変わりはないものの、コロナ禍においても多くの学会や議会が行われています。

明るい話題としては、旭日双光章、日本医師会最高優功賞の受章に関する報告があります。諸先生方のこれまで歩んできた歴史を興味深く拝読すると沖縄県医療の歴史、社会への貢献、尽力がひしひしと伝わってきます。

女性医師支援担当者連絡会に関する西由希子先生の印象記のなかで、「会議も学会もWebやハイブリッド開催が一般的となり、沖縄から離れることなく参加できることは小さい子供がいる我が身にとっては大変ありがたい。会議からの報告では、コロナ禍でパートナーの帰宅時間が早まったなどの理由から女性医師のワークライフバランスは楽になったと感じている人が多い（一部省略）」と述べられ、これまで後回しにされていた検討課題もコロナ禍で加速され良い変化をもたらしています。

テレビや新聞などで最近よく耳にする言葉のなかに、レジリエンス（resilience）があります。最新心理学事典によると「困難で脅威を与える状況にもかかわらず、うまく適応する過程や能力」とのことで、今を生き抜くには必要なことかもしれません。一方で時代に対応出来ない、出来にくい状況にいる人々への配慮も同じくらい重要であり、大切にしなければならないと思っています。

明治時代の文豪島崎藤村の小説「夜明け前」は、大政奉還、明治維新の大変革が起こった時代を背景にいろいろな人達の生活・人生の変化、心情の移り変わりを描写しています。これから何年後かに振り返ってみると、コロナ禍も私達の生活、仕事に大きな変化をもたらした出来事になっていることでしょう。英国の諺には、「夜明け前が一番暗いが、明けない夜はない」とのこと。

思いつくままに編集後記を書いてしまいましたが、本号も生涯教育コーナー、耳の日、世界腎臓デー、発言席、随筆などたくさんの先生方の投稿、協力のおかげで出来上がりました。深く感謝申し上げます。

最後に表紙写真年間グランプリは、浜端宏英先生の作品「朝焼け」でした。受賞コメントは「今度こそコロナ夜からの夜明けを期待しています」。

広報委員　久志　一朗